



TITLE:

<雑録> 蒙疆を旅行して

AUTHOR(S):

憲, 容

---

CITATION:

憲, 容. <雑録> 蒙疆を旅行して. 東洋史研究 1939, 4(4-5): 404-413

ISSUE DATE:

1939-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138795>

RIGHT:

# 蒙疆を旅行して

憲 容

## 1

(イ)「漢民族」否定論、蒙疆は三自治政府よりなる。人口は察南百三十餘萬、晉北百五十萬、蒙古聯盟自治政府二百六十萬位、蒙古民族は少くいふ人は三十萬、多くいふ人は七十萬で、余の昨年初夏第一次蒙疆旅行の途次厚和で面接した蒙疆政權首腦部の蒙古人ですら、各々そのいふ數を異にしてゐた。「蒙古聯盟自治政府七三三年甲年度行政概要」(成吉思汗紀元七三三年、昭和十三年)によると蒙古人總數は約三十萬になつてゐる。これらは何れも、今日最早完全に農耕化し或は半農半牧の生活をなし、漢人と雜居してゐるか或は混血雜居してゐる蒙古人を殆ど考慮に入れず、單に純遊牧地帶の蒙地の遊牧民のみについて推定せるもので、既に農耕化したる地域で漢人と雜居してゐる蒙古人が相當多數ある筈である。

現今日本人はこの蒙疆地帯にゐる漢人を漢民族と呼び慣はしてゐるが、余は「漢民族」なる言葉は使用せらるべきでないと思へる。

抑々「漢民族」なる言葉は孫文の最初唱へた三民主義の一たる民族主義を基礎づくるための便宜上の使用語であつた。それ迄は支那三千年の歴史に「漢民族」なる言葉は見出せない。支那人のことを、日本ではずっと唐人と呼び、南方では秦人と呼び、蒙古人は契丹人と呼んでゐた。是は成吉思汗が起つた頃蒙古の南が契丹だつたので南に住む人間を全部契丹人と呼んだのに因る。この影響をロシア人も受けて支那人のことをキタイスキーと呼ぶことになつた。又清朝が興る頃滿洲にあつては支那人のことを明人、唐人、秦人、或は漢人とも呼んでゐたが、明末になつて滿洲の遼東一帯に住んでゐた支那人は明朝の政治が非常に腐敗して挫

取は甚しかつた爲、より健全であり、非常に人民を大事にした後金國の英明汗(ザンギン)(御諱は奴爾哈赤ヌルハチ、清と云ふ國號は太宗の時に始り、それ迄は滿珠國マンジュク、或は後金國といつてゐた)即ち清太祖の善政に懷れて一日も速くその治下の人民になりたいといふ希望から、どん／＼後金國に自發的に投じて來た。その時、後金國ではこの新しく這入つて來た滿洲族でもなく蒙古族でもない、今迄明の支配權下にあつた混血人を何か一つの呼び方で、統一することが必要になつて來た。滿洲語では支那のことをニカン(Nican)、又書物の上では漢土といつてゐることもある。又明を離れ此方の人民になつたのだから明人と呼ぶのは非常に具合が悪い。それで支那人を組織して作つた軍隊のことを漢軍旗人と呼び、支那人のことをそれ以後漢人といふ統一した呼び方で呼ぶやうになつた。その後清朝が山海關から吳三桂の泣訴を容れて入關し、支那全土を統一するに従つて、滿洲族、蒙古族にあらざるツングース、蒙古、西藏、回紇ウイグル、苗族、彝族、客家族等の支那の土地において雜婚し混血した、その時まで明人とか、華人・夏人・唐人・秦人等と呼ばれてゐた人群をも漢人といふ稱呼に

統一して呼ぶやうになつた。故に支那人のことを漢人といふ稱呼に統一したのは清朝の仕業だといふべきである。長髮賊の洪秀全が清朝に對して叛亂を起した時に、興漢滅滿といふ旗幟で兵を擧げた。その時の興漢の意味は漠然と在來の支那人、即ち漢人を指し、その手に政權を取戻すといふにあつた。旗人即ち武士階級に對して、等しく町人とか百姓とかの立場に置かれてゐた所謂漢人の民人と、廣西・湖南・湖北・貴州あたりの文化程度は低いが暴力を振へば相當に働きのある苗族、彝族、客家族やこれらの混血兒の連中が呼應して立つたらしい。

その頃迄清朝は長年の平和と善政の爲に膨脹して行く支那本土の漢人の民人の爲に、湖北、湖南、廣西、貴州、雲南、四川等において改土歸流の政策を用ひて苗族等を度々彈壓してゐた。これに對する長年の反感が彼等の洪に味方した原因である。かういふ二つの内容を持つたのが洪の興漢滅滿の興漢の意味であつた。この滅滿の「滿」は要するに旗人全體を指すのでありそれには漢軍旗人、回々旗人(回子營)、高麗旗人(高麗營)俄羅斯旗人(俄羅斯營)等の多くの種族より構成

されてゐるが、これらに對する無知から只「滿」といふ字をして旗人を代表させ、武士階級に對する町人百姓の反感と暴動を挑發する爲に使はれた。だからこれには西洋流の所謂民族自決とかいふ意識はつきりしてゐないのである。それに民族自決意識といふやうなことは、廣西などは支那文化も非常にレベルが低く、本當の支那人も殆どゐない所であるから成立しない。下つて光緒年間になると、西歐資本主義諸國が滅茶苦茶に支那帝國を虐めてゐる。それ迄清國は人道的な立場から四億の民を阿片の害毒から守る爲に思ひ切つた阿片戰爭を、道光帝が王朝の運命を賭して戦つたのであつたが、その失敗以來清國は何とも有効な對抗策を講じ得なかつた。この狀況を孫文が見て、これはどうしても大清帝國を倒さなければ支那は更生出来ないといふ信念を持つに至つたらしい。

彼はそこで如何なるスローガンを掲げたか。外ならぬ三民主義である。アブラハム・リンカーンの演説のアメリカで有名な文句 *for people, to people, by people* の西洋流の民主主義思想を直譯して民族、民權、民生となし、それにその一黨の留學生達が一生懸命諸外國

の革命事例を各國の書物より拾ひ合せてできたものが三民主義であつた。その場合に三民主義はどういふことを旗幟にしたらいいか、どうも洪秀全のかつて稱へた興漢滅滿がよさうだといふので再びこれを旗幟とした。當時の支那中央、地方政權の大立物以下官吏は半分以上は漢人であり、それらの漢人官吏が蒙古や滿洲族の族地である長白山地帯に迄入れられてゐたにも拘らず、又上級官吏や駐防旗人中には蒙古族出身の旗人、漢軍旗人、高麗旗人、回々旗人等が随分ゐたにも拘らず、又その興漢滅滿といふ主張は支那においては最も反動的であり、五族協和をぶち壊し、支那の大局を破壊するものであるといふことは長髮賊の亂の場合において、蒙古族の僧格林沁親王、漢人の曾國藩、曾國荃、左宗棠、李鴻章等々により死を賭しての反對鬭争によつて證明され、更にその後には康有爲、梁啓超等の先覺者によつてもはつきりと言論、行動によつて證明されてゐるのである。それにも拘らず今度孫文はこの興漢滅滿の「漢」といふ字を漢民族といふ工合に民族の二字を西洋流に喰付けた。滅滿の「滿」を滿洲民族とし、こゝには勿論非常な民族の反感を起さ

せ、民族の協和を破壊する、東洋の眞の平和を望むならば絶対に感心出来ない一つのスローガンを作り上げこれを全面的に押出して、大清帝國の打倒に取掛つた。以後、國民黨一派は専ら支那愚民の反感を滿洲族へ集中するやうに宣傳煽動した結果、辛亥退位の際には大清皇帝は平和的に政權を譲渡したにも拘らずこの爲に多くの滿洲族、又或る地方においてはその滿洲族と共に旗に編入されてゐた蒙古族も澤山虐殺された。一例を挙げれば西安においては中華民國元年頃旗人が數千人も初めは手を斬られ後には足を斬られ、眼を抉られ、酷い虐殺に遇つたのである。而してこれと共に國民黨一派が築上げたる理論が大漢民族主義である。

この大漢民族主義とは、昔から支那に漢民族といふ非常に優秀なる純粹民族がゐてこれが支那文化を創造し、支那文化を發展させ、支那文化をずっと三千年來保衛維持して來た。他民族——西藏族、蒙古族、滿洲族、日本族等——の各野蕃族の歴代に亘る侵略、破壊、掠奪に對して、これを擁護し、この侵略と戰つて南方にぢり／＼と移つて行きながらも屢々北方から侵入して來た彼等の所謂蠻族を同化して漢民族文化を建設し

發展させて來た、といふのである。

支那人を若し民族と呼ぶならば何民族と呼ぶべきか、私は支那民族と呼ぶべきであると思ふ。

抑々支那民族とは現在支那に住んでゐる民族、英語で Chinese と呼ぶものであるが、支那民族が如何なる歴史を持つか、如何に構成されてゐるかといふことは偏へに科學的な今後の分析と研究とに待つべきだと思ふ。然し私が斷言し得るのは支那民族は世界に類例のない、一番酷く混合した民族であるといふことである。即ち有史以來三千年間一年として休むことなく、しかも今日迄——恐らく今後も——續いて滔々とその混血が繼續されて來たのである。支那は二、三百年に一度は必ず肉體的道德的にはより健全であり、純粹であるが、文化的には或は支那人より少し低いかも知れぬ外來の民族が支那に侵入し、文化的には少し高いかも知れぬが最早腐敗墮落複雑化した支那の社會を革清し、彼等の健全純粹なるが故に有する優秀なるイニシアシブと積極的な建設的實行力とを以て支那の社會を再建設して一の王朝を立て、さうしてその一部或は全部が支那の土地における文化を相當高めて後支那の土地に化

する。さうして支那民族が増大し、その地域が更に擴大する。これが支那歴史に今迄何度も繰返された實例である。例を挙げれば周は西戎である。又秦の始皇帝に率ゐられて支那を統一し、支那の郡縣制度を確立し、萬里の長城を築き、支那の制度文化に劃期的の貢獻をした秦人は蒙古族と西藏族の混血人種である。それから降つて漢の王朝を建てた劉邦は漢水に起つたが、これも恐らく在來支那人と西戎プラス南蠻の混血兒であつたらうと思ふ。その漢から魏晉を経て五胡十六國になるとこれらは全部外來の北方民族である。この時代にはそれ迄北支那にゐた支那人は殆ど南に追拂はれ、完全に新しく侵入した支那人の所謂「北狄」北方のツングース族やモンゴル族、西藏族やそれらの混血種族によつて入換へらるゝに至つた。五胡十六國時代に引續いた南北朝時代に、北朝の魏は非常な文化を創設した。今日支那において最大の文化遺跡である大同、龍門の石佛なども悉くこの鮮卑族拓拔氏の時代に出來たものである。これに續いたのが後周で、これもツングース族の一分派である。この後周は南朝の陳と共に隋に統一されたが、隋は後周の外戚である。故に隋は新

しい混血人種によつて構成されたことは言を俟たない。次に續いた唐はこれ亦回紇族と在來支那人との混血種である。唐迄の時代において、一體何處にゐた人間を漢民族と呼び、何處にあつた文化を漢民族文化といふのか、支那の歴史を少し注意深く讀んだことのあつた人がこれを疑はなかつたのが非常に不審に思はれる。唐の次の宋は淮水の附近から起つたのだが、こゝには隋唐の二代にかけて非常に多くの高句麗人（ツングース族）が滿洲より移されて來てゐたのである。それにこの地域は在來支那人と南蠻との混住地域である。この點から見ても宋人は混血種である。宋の次の遼金の金は滿洲族の先祖の一番中心をなす女眞族である。金は約百年間、長白山から興安嶺、黃河沿岸、揚子江北岸迄を指導し統治し、その文化を高めた。その遺跡の一つが有名な蘆溝橋である。金の前の遼は所謂契丹で熱河から起つてゐる。これはツングース族とモンゴル族との混血である。この契丹の殘した立派な文化の遺跡はどん／＼發見されてゐる。金に引續いて起つた元はいふ迄もなく蒙古族である。否、寧ろ成吉思汗が蒙古族を糾合して造り上げたといつた方が當つてゐる。

る。その頃迄萬里の長城以北にあつて遊牧狩獵を業となしてをり、滿洲以西、ウラル、アルタイ山脈以東にあつて互に争鬪を續けてゐたウラル・アルタイ系の雜多の各種族を征服と併合と懷柔とによつて統一して作つたのが今日の所謂蒙古族である。蒙古民族は西洋への交通路を開き、東西兩文化の融合に大貢獻をなし、軍事的には幾多の革命的貢獻をなし、民族的な抱擁力は實に偉大なものであつた。元に引續いたのが明で、明の天子は安徽省から起つてゐる。太祖朱元璋は乞食から身を起してゐるところから見ても、決して支那の文化人が立つて元の蒙古族を追出したのではない。朱元璋自身も「自分は天下を元の皇帝の手から奪つたのではない、國民を目茶苦茶に攪亂した群雄の手から取つたのである」と聲明してゐることから見てわかる。元が滅びた原因を他の方面より考察すれば蒙古人自身の内紛争鬪、邊疆中原の各混血種の叛亂に由來するものであり、その叛亂を平定一統し、秩序づけて都を南京に定めたのが明朝である。燕王（後の永樂帝）が今の北京に封ぜられ巧に北方のツングース族やモンゴル族及びこれらの混血族を懷柔し、それらと同盟關係を

結んでこれらの協力支援のもとに甥の惠帝を南京に討伐して天下を奪取し、初めて都を北京に移すことが出来たといふ様な點から見ても、永樂帝以後の明においてツングース・モンゴル系の人間やその雜種が重要な役割を果してゐることは疑はれない。尙、永樂帝が漠北迄蒙古を追撃した時にも彼の軍中には多くの蒙古兵がゐたのみならず、その道案内をしたのが蒙古人である。歸化城は明末蒙古族の有力な酋長であつた俺答汗の許に集まつた支那の亡命者が建て、俺答汗が明に降り順義王に封ぜられし時、當時明の天子であつた穆宗から賜つた名稱だといふことである。

永樂と北方民族との關係は唐朝と回紇との關係に似てゐる。明末に山海關にあつて清兵を防いだ勇將滿桂は蒙古族であるといふ様なことも一例である。明を滅したのが、今共產黨の根據地になつてゐる延安から起つた李白成で、その軍隊にも在來の支那人と西北方の混血雜種や外族も這入つてゐたことゝ思はれる。この李白成の餘りに亂暴な虐政に對して、全支那の民衆殊に明朝の最大の殘存勢力である吳三桂の全軍は、奉天の清政府の方が遙かに文化的で、健全で、善政を布い

てゐるのを見て、今迄の常識でいふと同じ「漢民族」（この「漢民族」といふ言葉も意識も當時は勿論なかつた）李自成の下に立つとか、李と協力するとかよりも、清と協力した方がましだと悟つて自から進んで泣訴し來り、清の所謂漢軍旗人となつてその全支統一に犬馬の勞を致したのである。國民黨發祥の地廣東の近世史を見るに、廣東は苗族、獠族、客家族、馬來系等の雜種の居住地帶であり、清初にあつては最も文化の遅れた所であつた。住民も所謂南蠻の色彩最も強く、廣州城が西歐との開港場になつてから清廷の指導下に一大計畫の下に開發された。この廣東地方の南蠻の色彩が如何に強いかは、今日の廣東人が容貌、骨格、頭髮、皮膚等においても南洋土人との類似が實に多く認められ、廣東語の發音が漢字では表現出來ないのが澤山あり、性格も亦南洋土人のやうに短氣精悍で情熱的であるといふやうな點を見ても分ると思ふ。この廣東から革命の狼火が揚つたのだが、清朝を倒したのは決して革命黨ではなく、北洋軍閥袁世凱である。袁が北洋軍閥の勢力をバックにして大清皇帝に政權を譲らしめたのである。國民黨が彼等の誇稱する一九二四年か

ら二七年へ掛けての大北伐時代の功績は大部分聯露容共政策によるもので即ち共產黨のおかげである。「漢民族」なるものが事實上存在しないといふことが以上の歴史的事實から證明さるのである。

滿洲事變以後國民黨は始めて己むを得ず、邊境諸民族問題を眞剣に考慮し出し、今迄の大漢民族主義では他民族の反感を和げ得ぬのでこれを出来るだけ表面上より引こめ、中國共產黨同様「中國民族」なる語を専ら使用し出しこれを民族革命、民族抗戰の標語の内容としてゐる。この「中國」なる二字に留意すればこれはなんといつても民族の固有の名稱とはいへまい。このことと有史以來、血統的に純粹であり、種族的團結をもつてゐた支那周圍のツングース（後には滿洲系・蒙古系（以前は匈奴・或は韃靼）やその混血（鮮卑等）系・西藏（時には西戎）系・回紇（時には突厥・月氏）系や苗獠・客家等の南蕃系の諸民族が、一旦支那本土へ侵入しこれ之統治するや（或は支那自體の膨脹の爲に）在來支那人と接觸の度を多くもつに従つて、農耕、手工業、象形文字の三者に基礎を持ちこれを特色とする支那文化の更新、維持、發展に嶄新にして健全なる



實行力を以て貢獻し、これに自己の持てる文化を混合融和させて支那文化自身を發展、豐富化させると共に、一定時期を経ると段々とその血統的純粹性を失ひ、これに基礎を置く團結力も緩み出す、この過程の進行するに従つて最早種族的プライドを失ひ、我こそは何々族であると自負自誇する代りに、在來の混血支那人同様、俺は文化人だ、華人（夏人或は中國人）だ、お前等は野蠻人の東夷・西戎・北狄・南蕃だといふ心理になつて行く、この繰返しが今日迄續いてゐるが、この結果が今日の支那民族である。

（ロ）蒙疆の民族構成 翻つて蒙疆の民族構成を検討すれば、滿洲におけるが如く、邊境より漸次南に至るに隨つて純粹な蒙古族から次第に混血の度を加へ、複雑になつて來る、混血種（清初より漢人と呼ばれて來た所の）よりなる。

即ち、この地方の混血種は漢代の匈奴以來、異民族接觸の結果、蒙古族、ツングース、回紇、西藏、在來の支那人（即ちその時迄に既に出來てゐた混血種）等諸族との混血により構成せられた所謂漢人（清初より大體漢人といふ統一した呼稱で呼ばれ、その中の幾十

分の一かは今日回々教徒なり）である。これ等と綏遠城その他の都市に居住する何萬かの駐防旗人たる滿洲族と遊牧地帶の蒙古族とが蒙疆人口のすべてである。

尙、遊牧地帶の蒙古族と雖も嚴密な意味では純粹とはいへなく、その殆どが滿洲族と混血してゐるのである、

成吉斯汗一族の博爾濟吉特氏と大清帝國皇族愛新覺羅氏との婚姻關係は清朝三百年に亘り今日迄續いてゐる。

我肅王家のみでも蒙古に數十餘の姻戚を有して居る。太宗神聖英武汗以來大清皇帝の身位は成吉斯汗の

正統を繼承する蒙古大汗であり、蒙古、西藏兩族の數

百年來崇信せる喇嘛教の最上活佛であり、同じく喇嘛教を信仰する滿洲族に取つては族長でありその民族宗教である神教の現神である。又、文化的に見ても滿洲

文字は太祖英明汗が蒙古文字によつて作らしたのであり言語も同一系統に屬し酷似してゐる。以上の如く滿

洲、蒙古兩民族は皇王族より一般庶民迄三百年間相互結婚を續け、地理的、文化的、風俗習慣的にも近接し、

最早今日外蒙以南、新疆以東の兩民族にして混血ならざる者はないと斷言してもよいほどである。蒙疆の所謂純蒙古族（實は滿蒙混血種であり、漢人の所謂「蒙

古人」である）は六七十萬位と推定される。この他にも同様の蒙古族數十萬は清初より、滿洲族と共に或は畿輔駐防として河北北部や察南の各地（密雲、山海關、張家口、獨石口、古北口、喜峰口、昌平、順義、三河、玉田、寶坻、固安、東安、采育、雄縣、霸州、良鄉、保定、滄州等）に、或は各省駐防として、（青州、德州、綏遠、太原、開封、京口（鎮江）、江寧（南京）、福州、杭州、乍浦、荊州、西安、寧夏、涼州、莊浪、成都、廣州（廣東）、惠遠、惠寧、古城（惠遠以下三地は新疆省）等に居住し、今日と雖もその子孫は多數殘存してゐる。純粹蒙古族の居住地域に接近し、最も蒙古族の血液の度合の濃厚な混血種の地方を私は昨年トラツクで通過した。この地方の寶源縣の農民を試みにインタビューして、お前は何人かといつたら、俺はマンズレンだと答へた、不審に思ひ滿洲人かと念を押したら、否といふ、漢人かと問へば、はあといつて分からね、蒙古人かと問へば、否、矢張りマンズレンだといふ。それで少し物識りに字を書かしたところが「蠻子人」と書いた。如何に彼等が蒙古化してしまつてゐるかがわかるであらう。彼等の先祖は南の方、南といつても

河北・山東・山西等から移住して來たので、以前から蒙古人と喜んで結婚し、大抵蒙古語が話せる、秋になれば草原の蒙古人に傭はれて草刈や、色々な雜役に服するのにも相當にゐる。顔形や目の色や身體の恰好も非常に蒙古人の色彩が濃厚である、Owen Lattimore は、この邊の長城以北一帯を踏査研究してこの混血種によつて構成された地方を民族的貯水池と呼んでゐる。

以上述べた所により私は蒙疆地方の民族が、蒙古族、滿洲族及び一般の混血種（普通漢人と呼ばれてゐるが）によつて構成せられてゐることを明かにしたと思ふ。

## 2

察哈爾盟の四旗は、最近蒙古聯盟自治政府が白音達來盟を創設した際にその方へ併合されたが、この察哈爾の地は明末清初、この地方に據つてゐた成吉斯汗の嫡統林丹汗が興安蒙古の蒙古族を攻立て、これを隸屬せしめ、總て全蒙古を支配せんと企てたが、經濟力も貧弱な上に蒙古族の利益に反して明に附いたので、人望もなく、先づハブト・ハサール（成吉斯汗を一番よく助けた同胞弟）の子孫の系統である科爾沁蒙古（興安蒙古の代表的勢力）の忌避にあひ、戰亂絶えず、科爾

沁蒙古は新團體の下で搾取され、虐待される虞が最も多いので、清の太宗神聖英武汗ボクトソフエンジュに頼り、遂に遼東の漢人（それ迄は明人と呼ばれてゐた混血種）と長白山地帯の滿洲族と協同して太宗神聖英武汗を推戴して、大清皇帝の稱號を奉つた。その結果、科爾沁蒙古と纏てその傘下に馳せ参じた熱河一帯の喀喇沁等昭烏達盟、卓索圖盟の蒙古と協力して林丹汗を征伐することになり、林丹汗は滿蒙同盟の基礎に立つた新興清軍の爲に慘敗し、遠く奔竄した。太宗皇帝は林丹汗の子を後繼者として察哈爾に立てたが、その後彼は他に煽動されて叛亂を起し、征討されて滅びた。察哈爾の地は滿蒙兩族の協同政權になつてゐた所の清政府より改組され、こゝに各地の各種族を移住せしめた。かく造上げられたのが察哈爾部（群牧場等の名稱もある）である。それより以後、全蒙古族から大清皇帝は成吉斯汗大統の婿養子（事實太宗皇帝の皇后は博爾濟吉特家ボルチギトの娘である）として正統の蒙古皇帝（或は蒙古大汗）と今日迄崇められてゐる。かういふ歴史があつた爲、清朝時代蒙古各地において指導者たる王公を失つて散亂した群小諸族或は叛亂して滿蒙聯合軍に討伐され捕虜となつた雑多

の種族的群或は後に喀爾丹カルダンについて内蒙及び外蒙を荒し廻り、大清皇帝に討伐されて捕虜になつた額勒特族の小群、或は大清皇帝を頼つて康熙年間全族を擧げて避難して來た外蒙古の喀爾喀族カルカの外蒙に歸らなかつた小群及び滿洲族や漢軍旗人から組織されたのが所謂察哈爾部（不合理な旗といふ名を與へて歴史的事實に即した組織を切崩さんとしたのは袁世凱の陰險な術策で以前は察哈爾部と稱され滿蒙同盟の王朝の北京政府から軍管區として直轄的統治を受け、政府に對し優秀なる馬と騎士と馬丁との供給地として長年忠實に奉仕して來た。今日もこの體はしき滿蒙關係は蒙古人の萬人の胸に銘記されてゐる事は余の昨年の旅行によつて再確認されたのである）で、察哈爾の民族構成は外蒙、内蒙、興安蒙古、阿拉善蒙古、青海蒙古、新疆蒙古を通じて最も複雑であり多種多様であるといふ點は大いに注目と認識と研究とを要する點である。故に察哈爾は恐らく今後蒙古近代化の一番成績を擧げ得る模範地方になることと思はれる。私はこのことは地理的に歴史的にまた氣候風土的に見ても十分納得されることと思ふ。